

令和7年度 八尾市芸術文化振興審議会 第4回ワーキング部会

日 時：令和8年2月19日（木） 午後7時25分～午後8時40分
開 催 場 所：八尾市役所西館4階 401会議室
委 員：藤野委員、萩原委員、徳委員、平井委員、大平委員、森本委員、
山本義則委員、山本凌万委員、吉波委員
事 務 局：杉島、古川、渡辺（文化・スポーツ振興課）
八尾市文化振興事業団：井上さん
傍 聴 者：0名

事務局より配付資料の確認。

- ・次第
- ・資料 芸術祭の開催構想（案）

1. 開 会

事務局から、会議の定足数の確認及び会議の公開、傍聴について説明した。

- ・出席委員は9名であり、定足数を満たしている。
- ・審議会等の会議は原則公開。
- ・会議録の各発言に対する委員の氏名は、部会長は部会長、その他の委員の皆様についてはアルファベットでA委員、B委員等とし、内容は概要とする。

2. 案 件

芸術祭の開催構想（案）について

事務局から、前回のグループワークで出た意見を取りまとめ、資料のとおり芸術祭の開催構想（案）を作成した旨説明した。今回はこの開催構想（案）について、協議を行った。

（1）開催の目的・趣旨

部会長

日常の中に「余白」と「出会い」を創り出し、持続可能なまちづくりをめざす。ということで、皆さんの意見をうまくまとめていただいた。

元々やろうとしていた芸術祭も、内なる国際を意識していた。世代や国籍を超えた人々が交わり、八尾の魅力を再発見することにつながっていけばいいし、これが目的になればいいと思う。

目的・趣旨がはっきりしないと、テーマ・コンセプトにつないでいけない。目的・趣旨について、皆さんの意見をいただきたい。

文化振興事業団

最終的に審議会に出す時には、パッと見てわかる文字量にしたほうがいいと思う。結構読むのが大変だ。優先度が高いキーワードをいくつか抽出して記載したほうがいい。

最後の行だが、対象者が見えるといいなと思う。まずは住んでいる人に重点を置くのか、外からお客さんを呼ぶことに重点を置くのか、ここに入っていないので入れたほうがよい。

最終的に、外からお客さんが来て、八尾市民が自分たちのまちが活性化したと喜ぶのか、まずは市民が主体となってみんなでお客さんを呼ぼうというベクトルなのか、どちらがいいのか。そこが入ればよいと思う。

部会長

私のイメージだが、芸術祭は一発物で終わるのではなく、継続性を持たせたい。今回は八尾市市制施行80周年という八尾市の記念事業の位置づけで提案していければと思っている。まずは八尾市に住んでいる方々がメインの主体になるべきだと思う。八尾市民が自分事として取り組んでもらえるように持って行きたい。

A委員

八尾が中心でいいとは思っている。ただ、それを外にどれだけアピールできるか。僕は香川県善通寺市で個展をしているが、そこには市長も来てくれており、僕としては、八尾市と善通寺市で何かできたらいいなと思っている。

先日、善通寺市で芸術祭のようなものやっていた、僕も呼んでくれたらいいなと思っていたが、呼ばれなかった。

八尾市以外の、外部で芸術祭に興味のある人たちもいると思うので、そういう人たちまではじくことはないのではないかな。地元と外部の人間をうまく具合に融合させることができれば、内にも外にも向いたものができるのではないかな。

部会長

もちろん、八尾市民だけということではなく、八尾市民が主体となり、外からの人達にも力を貸していただきながらの芸術祭になって行くと思う。

B委員

A委員がおっしゃったように、八尾中心でありつつも、それぞれのつながりを活用していけばいいのではないかな。

部会長

いずれにしても、八尾に住んでいる、八尾で生活している、働いているという人達が輝いてもらわないと、外からいい人を呼んできても、それだけではしんどいと思う。

八尾の人達が自分事として関わってもらえるように、働きかけをしていければと思う。

A委員が善通寺市で個展をしていて、芸術祭の声かけをしてほしいと思ったように、八尾で活動しているアーティストの皆さんに、声をかけてほしいと思ってもらえるように、声をかけていけるように働きかけていきたい。

どんな芸術祭にするかはこれからの話だが、目的・趣旨のところ、ごちゃ混ぜの交流とか、持続可能な文化醸成とか、この辺りを意識して八尾市民が関わっていければいいと思う。ここのベクトルを合わせたうえで、次のテーマ・コンセプトに進んでいきたい。

C委員

「余白」に違和感がある。余白って作れるものなのか。こういうことだというものがあれば教えてほしいのだが、私の妻は、子どもが二人いて、手がかかるため、何もしない時間、無心になれる時間なんてまったくなく、精神的に参っている。それが芸術祭を通じて、そういう時間、空間を作り出せるのか、あまりイメージがわからない。

それとも、そういう人がそもそもターゲットではないのか。

そういうことではなく、こういうことを言っているのだというものがあればお聞きしたい。

部会長

日々、生活に一生懸命な人達が、ふと芸術や文化や音楽や作品に触れることによって、自分の中に少し気持ちのゆとりが生まれる、それが余白というニュアンスになっていくのかなと思う。芸術や文化等の何かと出会うことによって余白が生まれ、それが持続可能なまちづくりにつながっていく。八尾っていいまちだと思ってもらえたり、私も将来こういうことをやってみたいと思えたりすることが、持続可能なまちづくりにつながっていくと思う。

C委員

おっしゃることはわかる。余白という言葉のチョイスがしっくりこない。

部会長

すべての年齢層、すべての八尾に関わる人達がターゲットであり、排除する人は一人もいない。全員がなんらかのアートに触れてほしいと思っている。色々なイベントが開催されていくと思うが、どれか一つでも刺さってくれたらいいなと思っている。

アートというのは余裕のある人の方が触れやすく、日々の生活にいっぱいいっぱいの方は、そこに触れる機会がないというか、時間もお金もかける余裕がないというイメージがあるが、余裕のない普通の人でもアートに触れることによって、余白を作ってもらって、という話を前回のグループワークでしていた。

A委員

絵を描いたり、デザインしたりする人にとっては、余白は結構大事で、そこに想像力が入っていく。なので、余白という言葉は僕はずっと受け入れられるが、C委員の話を聞くと、そうではなく、強制的なものを感じられているのかなと思うので、一般の方と僕らの受け取り方が少し違うのかなというものも感じた。何か違う表現が必要かもしれない。

E委員

僕も初め、余白にちょっと違和感があったので少し考えてみた。

例えば、おなかがいっぱいの時に、目の前に甘いものが現れたら、おなかに少し余白ができる。芸術祭についても、そんな感じのことが起きるのかなと思った。そういうことを考えると、違和感もありだなと思った。日常に余裕がない人も、ちょっと非日常であったり、アートに刺激をされたりすることで、余白が生み出されることもあるのかなと思った。

部会長

本の世界では、行間というものを作家はすごく大事にしている。文章と文章をわざと一行空けたり、改行を意識したり、それに近いのかなと思う。

ちょっと空くことによって色々想像して楽しめる、それが余白なのかなと思う。

F委員

アートのことはあまりわからないが、余白はありだと思う。毎日忙しいが、自分がピピッと来たものを見たときは、非日常になり、わくわくすることがある。

文化振興事業団

この単語がどう伝わるかだ。椎名林檎と宇多田ヒカルの曲で、「二時間だけのバカンス」という曲がある。二人とも子育てしているが、ちょっとだけハイヒールを履いて、おしゃれして出かけて、自分がヒロインになりましょうという曲だ。余白とはそういうことだと思う。

ただ、受け取り方は人それぞれで、日々忙しくて追い詰められている人が、余白を渡されたら、拒否感が出るのかもしれない。余白を作りたいと思える芸術祭であってほしいということだと思う。

F委員

その通りで、その時だけは家や会社のごちゃごちゃを忘れられる、というのがベストだ。

G委員

こうやって、余白という言葉について、何だろうという疑問が出て、いろんな意見が出ていることが重要なのだ。近い言葉で言えば、「ゆとり」や「あそび」という言葉で置き換えられる。ただ、「ゆとり」や「あそび」だと一義的になってしまうし、特定のイメージができてしまう。対して、「余白」って何だろうという議論が起きている。これが重要なのではないか。

僕は余白に違和感はないが、おっしゃるように、文学は余白があるから想像力が働く。あるいは、デザインにおいても、空間における余白はすごく重要だ。生活の中でも余白は重要で、アートは無意味だからこそ意味がある。

部会長

こうやっていろんな意見が出て、余白という一つの単語でいろんな捉え方があることがわかった。

G委員

みんなが納得できないほうがいい。議論が起きるような単語の方がいい。

別のところで、アートは異物だという言葉も出てきており、日常の中で流れていくものに対して、それをせき止める、立ち止まらせる力もある。そういうものも余白の中に入ってくる。余白って無限な感じがしていいなと思う。

部会長

ここで余白という言葉振っておいて、キャッチコピーに活かすかどうか、みなさん考えていただいて、ご意見をいただきたい。

(2) テーマ・コンセプト

部会長

資料にある案をもう少しブラッシュアップできたらと思う。

文化振興事業団

今後、もう一度ワーキング部会があって、審議会で提案という流れであれば、一度持ち帰って、それぞれが一案を出してみるというように、宿題で持って帰ってもいいのではないか。今、このままの状態でも多数決を取るというのももったいない気がする。みんな、色々な思いがあたりだと思っているので、この資料をヒントにキャッチコピーを作ってもらったらどうか。何を一番重視するかで変わってくると思う。

H委員

どの案にしろ、八尾らしさを大切にしていることは感じるので、そこは残せるようにしたい。先ほど文化振興事業団がおっしゃったように、資料の案は、前回、グループで話し合った内容をまとめたものが出てきていると思うが、最終、個人がどう思っているか、もう一度みんなの話が聞けたらいいと思うので、持ち帰るのはありだと思ふ。

部会長

持ち帰って、次で発表ではタイミング的に遅いので、次の部会までに各自の案を出し合ってもらう形がいいと思う。次の部会では決定して、審議会に提案できるようにしないとイケない。

F委員

テーマ・コンセプトが役所っぽいか、うまく言えないが、もっと響く言葉にしたほうがいいと思う。

文化振興事業団

リクルートの観光コンテンツ造成事業報告会というのが先日あり、違和感みたいなものがあつたほうがいいという話をされていた。

部会長

元々、じゃらんの編集長をされていた方の基調講演で、キャッチコピーというものは違和感を持ってもらえるもののほうが、パッと目を引いていいということを言っておられた。サラッと流れるものは人の頭の中に残らない。違和感のある言葉を入れることによって、人の頭の中にとどまるらしい。そういうことを意識したキャッチコピーになれば、なおいと思う。

F委員

おっしゃられたように、ちょっととがった言葉が入ったほうがいいと思う。

D委員

八尾っていい意味で中途半端なところだと思っていて、田舎でもないし、都会でもないし、それがすごくいいところだと思う。

A委員

人から聞いてすごく刺さつたのが、「ちょうどいい、八尾」という言葉

だ。なんかそういうような空気があれば、みんな引っかかってくるのではないか。以前、広島がキャンペーンをやった時、「おいしい！広島県」という自虐的なキャッチコピーがあり、それもすごく響いた。

八尾市は物足りないと言えば物足りないかもしれないが、ちょうどよさが心地いいと僕自身も感じている。そういうことをアートに転化できたらいいなと思う。

部会長

河内弁でちょうどいいを表すいい言葉はないか。

D委員

「ええあんばい」というのはどうか。祖母がよく言っていた。

知り合いや友達で、八尾を最近知ってくれた人がびっくりしてくれるのは、八尾に空港があることだ。

部会長

空港は何とか巻き込んでいきたい。ちなみに、セスナ機に4人が乗って遊覧すると、30分で約7万円だそう。芸術祭の企画の一つでそういったものも入れることができたと思う。しおんじやま古墳学習館が企画したところ、一組だけ申し込みがあったそう。

F委員

自衛隊も巻き込めたらいいと思う。自衛隊援護協会の会員になると、個人会員の会費は1万円だが、ヘリコプターの体験搭乗などができる。

部会長

いろんな人を巻き込んでいって、「ちょうどええまち、八尾」にするというのもありだ。

D委員

工場もよく言われる。京都で会った人にも、八尾は工場が多いねと言われた。工場と空港は八尾のアイデンティティの一つだと思ってもらっているのではないか。

F委員

仕事で関東に行った時にも、お客さんから空港と町工場はよく言われる。

部会長

先日の観光コンテンツ造成事業報告会の会場でも、廃材アートが展示されていた。

B委員

廃材アートについては、工場側からすると、いい物を出すこともできるが、逆に不具合品等を使って作品を作る方が響くというところがある。

部会長

こういったことから、みせるばやおさん、ファクトリズムさんとは芸術祭に向けて連携していく必要がある。

ちょっと違和感を持たせながら、キャッチコピーを作る必要がある。雑誌を作るにしても、イベントを組むにしても、キャッチコピーがすごく大事だとおっしゃっていた。

文化振興事業団

芸術祭という言葉でアートイベントだということは伝わるので、キャッチコピーにアートの要素を入れるかどうかは気にしすぎなくてもいいと思う。

今のお話を聞いていると、「ごちゃごちゃしていて、最高です」とか、「ごちゃまぜ、最高」とか、そんな感じかなと思う。

部会長

キャッチコピーに今はそんなに時間はかけられないが、八尾ならではのキーワードを踏まえて、皆さんに色々考えていただきたい。次のワーキング部会までに集約していければいいと思う。

(3) ターゲット

特に意見なし。

(4) 開催規模

部会長

前に提案させていただいたのは、春、夏、秋、冬というようにシーズンで分け、シーズンごとに開催エリアも分ける。エリアごとに1か月、トータルでは4か月の規模で実施してはどうだろうということだ。

例えば、久宝寺緑地は夏開催とした場合、夏休みの1日はフェスをやる。別の日には立体アートの作品展をやる。そんな感じで、夏休みには久宝寺緑地エリアで集中的に実施する、というような形で実施してみてはどうか。

はたまた、そうではなく、エリアを集中させ、例えば今年は、近鉄八尾駅からファミリーロード、常光寺あたりまでのエリアに集中して実施するなど、開催規模とスケジュールについて、皆さんの意見をいただきたい。

D委員

インパクトを残したいと思っており、1か所に多くの人(2,000人くらい)が集まる仕組みづくりがあるといいと思う。まちかどライブクリエーションとの差別化というか、まちかどライブクリエーションをやってきて、八尾でイベントが増えてきたなと思うところからの爆発を期待している。

広範囲のエリアで、持続的に何かをぽつぽつとやっているというのもいいのだが、まちかどライブクリエーションと差別化できないし、毎年やっていたなという印象を持たれてしまうのではないか。

それであれば、久宝寺緑地のような大きな会場が人でいっぱいになるくらいの、その規模感のインパクトがあればいいなと思う。そこでフィナーレがあるような感じでできれば、八尾市民の人たちや芸術祭に来てくれた人たちの印象に残るのではないか。

C委員

1回目なので、盛り上がっているという感想は持ってもらいたい。なので、期間に関してはある程度集中させて、エリアに関してもある程度絞ってやった方がいいのではないかなと思う。

部会長

まちかどライブクリエイションみたいに八尾市内に散在させるというのは、芸術祭にはあまり合わない気がしている。

文化振興事業団

例えば、久宝寺緑地で河内音頭まつりをやっていたときは、本町から高安方面の人たちが、自分たちには関係ないというスタンスだった。なので、1か所に集中してしまうと、自分たちには関係ないと言い出す人たちが出てくると思う。最初は特に、住人みんなと一緒にこれをやろうというように、地域に入って一緒にやろうという声かけをすることで、市民の意識を盛り上げていけるのではないかと、というのが出発点だった。

かといって、数日に絞って全域で何かをやろうとすると、マンパワーも足りないので、地域を分けて全域にアプローチする形にしたほうが、まちの人、地域の人に興味を持ってもらえるのではないかと。

部会長

八尾市にはまちづくり協議会（まち協）というのがある。まち協に声をかけ、そのエリアの芸術祭の運営を一緒にやってもらうというのはどうか。また将来的には、お寺の檀家や神社の氏子等にも入ってもらって、そのエリアの芸術祭の運営実行委員会を作ってもらえないかと思っている。

僕たちだけで大きな芸術祭をするというのは、マンパワー的にもお金の面でも非常にしんどい。それを考えると、他の団体、例えば商工会議所やライオンズクラブ、JC（青年会議所）、ロータリークラブなどの代表者たちにも実行委員会に入ってもらい、運営には地域のまち協にも入ってもらいながらやっていく形ができないか。まち協が入ると、各地域で芸術祭が自分事になって行くと思うので、そういう巻き込み方ができないだろうかと考えている。

A委員

そうすると、それぞれのエリアのイベントがぶつ切りになってしまって、ここにはこの地域の人しか来ない、別の地域の人には自分の地域のイベントにしか来ないという危惧がある。

僕はストーリーを大事にするのだが、大きなフェスをメインにして、年間をかけてイベントを各地域で担ってもらい、それを最後のフェスにぶつける。各地域で実施したイベントの成果を大きな会場で発表する形にすると、みんながそこに集まってくる。一つのメインイベントに対し、イベントを繰り返していくような形がいいのかなと思う。フィナーレに向かってストーリーができ、市民の人にも向かっていく流れができれば面白い。

部会長

市民の皆さんと一緒に何かを作るというのを芸術祭の中に混ぜていけたらいいと思う。非常にハードルが高い話をしているので、実際にできるかどうかはわからないが、自分事にしていくためには、まちを巻き込んでいかないとできない。

文化振興事業団

わかりやすい例を出すと、久宝寺緑地でやるとなると、高安地域で活動し

ている人は、なぜ高安は、やまんねきはやらないのかと怒ると思う。

芸術祭を大きくしていこうと思うなら、その納得感があってほしいなと思う。

部会長

自分事に落としていくというのは非常に難しい。

もう一つは、芸術文化をハブにして、福祉や教育、産業など、いろんな分野が集まっていくのが芸術祭というイメージになればいいと思う。市の条例に基づいて発展していく芸術祭というのは、そこに醍醐味があるのではないか。

他の芸術祭との違いは何かというと、芸術文化がハブになり、各分野を横串にして、市民が自分事として広げていく。どこまで風呂敷を広げていいのかわからないが、そういうことを目標に、芸術祭もだんだんと大きくなっていくと思うが、最終はその理想形に近づくように、どういう種をまくか。

文化振興事業団

次の世代の担い手を育てていく。今小学生の子たちが参加し、20年たったらメインになってくれるような取り組みになればいいと思う。

部会長

今、小学生でも河内音頭を踊れない子がたくさんいる。芸術祭をきっかけに、みんなが河内音頭を踊れるようになったり、唄を唄えたり、楽器を演奏できたりするようになればいい。

2028年度の芸術祭は種まきでもある。種をまいて育てていく意味合いでもある。

A委員

個人でもつながりは作っていける。今年、D委員がプリズムホールで大きなライブを行う。それを芸術祭のオープニングイベントくらいの位置づけにするというのも考えられる。

G委員

パフォーミングアーツを中心としたものであれば、最後に集大成として、フェスで発表するという見せ方もあると思うが、表現形態として、3本柱で出ている中で言うと、サイト・スペシフィックアート、現代美術は、場所性がすごく重要なものであり、作品を移動させることは意味がないものになってしまう。あと、共創アートの場合も多文化共生や社会包摂という観点のものであり、パフォーミングアーツも含めた3つの表現形態をやるとすれば、集大成を1か所に集めるというのは難しいのではないか。もちろんできるものもあるが、場所を活かした取り組み、例えばアーティスト・イン・レジデンスで場所を活かした作品を作る場合、その場所でしか見られない価値がある。そこをどうするかは考える必要がある。

例えば、エリアを分けて、エリアの特性から、ここではサイト・スペシフィックアートをやろう、ここはフェス型でいこうというように、エリアごとのパターンを作るのもいいと思う。

A委員

全部を1か所に集める必要はないと思う。現代美術の作品展示はイベントで完結させ、何かしら人を呼び込めるようなアイデアをつなげていければと思う。

文化振興事業団

そういう交流はあったほうがいい。コモンズと地域の交流はあっても、地域同士の交流が入っていないので、A委員のアイデアは有効だと思う。

(5) イベント名

部会長

今は、八尾まちかど国際芸術祭（仮）となっているが、審議会で木ノ下先生からも、国際を入れると、世間一般のイメージとして、国際のイメージが強くなってしまうので、自分たちのハードルを上げすぎてしんどくなるのではないかというアドバイスを受けている。

意識の中では、内なる国際はやっていきたいとは思っている。八尾にはいろんな国の方がいらっしゃる。でも、国際は外したうえで、名前は決定して走り出したいと思っている。この資料に記載の案の中、あるいは違う名称案でも構わないので、出していってもらえたらと思う。

次回の部会で、芸術祭の名前、目的・趣旨、テーマ・コンセプト、ターゲット辺りまでは決定したい。開催規模やエリア、時期というのはもう少し時間をかけてもいいと思う。

3月5日（木）までにキャッチコピー等のご意見を出していただき、3月19日（木）のワーキング部会で決定する。3月27日（金）に審議会があり、今年度の報告とともに、次年度の話をして、4月からは具体的に進めていければと思う。

事務局から、次の会議は八尾商工会議所会館3階の多目的室で実施する旨説明し、終了。